

安楽寺だより

第 8 号

2面 親鸞聖人のご生涯(その3)
 3面 永代供養墓を建立
 4面 仏教豆知識(念珠)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

宗祖親鸞聖人750回



御正当報恩講

親鸞聖人のお言葉を静かに聞きましよう

親鸞聖人は、七五〇年前の一二六二年(弘長二年)十一月二十八日に九十年のご生涯を閉じられました。聖人を宗祖と仰ぐ私たちが真宗門徒は、聖人のお言葉をお聞きしながら、報恩講をお勤めいたします。

私たちの先方は、何百年にもわたって聖人在世のお姿を偲びながら、「とももの同朋にもねんごろのこころ」(御消息集)と、申されるように、あらゆる人々を「御同朋」として見出していかれる聖人のおこころを確かめ合って念仏相続の仏事を脈々と勤めてこられました。

聖人の面影をよく表しているお言葉をご紹介します。

『某親鸞閉眼せば、加茂河にいでて魚にあたうべし』(改邪鈔)

このお言葉は、命終が遠くなく感じられた聖人が身近な誰かに語られたと、伝え

られています。ある意味で遺言と聞いてもよい言葉ですが、聖人がこの世を生きる覚悟を具体的に語られた一言として、私に迫ってきます。

『我が歳きわまりて、安養の浄土に還帰すというとも、和歌の浦曲の片男浪の、寄せかけ寄せかけ帰らんと同じ』(御臨末の御書)

『一人いて喜ばば二人と思ふべし、二人居て喜ばば三人と思ふべし、その一人は親鸞なり』(同)

聖人ご命終のあと、書き残されていたと伝えられるお言葉です。聖人の教えによって念仏者となった御同行と共にありたいと、願い続けられた聖人のお姿を実感を込めて語られたお言葉と頂きたいと思えます。お言葉を通して浮ぶ聖人の人間像を想いながら、報恩講をお勤め致しましょう。

親鸞聖人のご生涯

その三 法然上人との出会い



安養寺(吉水の草庵)

『雑行を棄てて、本願に帰す』

親鸞聖人は、聖徳太子からいたただかれた「夢のお告げ」に励まされ、すべての人が救われていく仏教を求めて法然上人を訪ねられます。そして、自身の仏道の歩みを大きく転換させる出会いを果たされました。

法然上人は、このころ京都・東山の吉水の草庵(写真)にお住まいでした。すでに六十九歳になられておられました。が、教えを聞きに訪れる人々の数は大変多かったといわれます。上人はどのような人にも、迷いを超える道を説き続けて

『雑行を棄てて、本願に帰す』

おられました。まさに出家・在家・善人・悪人の区別を超えて、万人に仏教が語られていたのです。聖人も吉水に百日間通われ、ついに決定的な転機を迎えられます。

「智慧第一の法然房」と呼ばれた上人は、「愚者になる」「愚かな自己に目覚めることによつて救いを得ていくのです」と、日頃語っておられました。聖人は、法然上人から「煩惱を断ち切ることができない自分への目覚めこそが、実は仏教に近づく確かな道である」との教えをいただかれ、『本願に帰す』と、表明されました。

『しかるに愚禿積の鸞、建仁辛の酉の曆、
雑行を棄てて本願に帰す』(教行信証)

親鸞聖人は、本願と出会うことによつて、愚者としての自己に目覚め、本当に開かれた大乘の仏教に出会うことができたのです。

真宗門徒になるための本

大垣教務所発行 ご希望の方進呈

宗祖聖人御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」

俱會一處

〔俱會一處〕

く え い つ し ょ

先日九月二十日、秋の彼岸入りの日、八事霊園内の安楽寺墓地に永代供養墓を建立し、建碑式（お墓開き）を執り行いました。当日は、台風接近の影響で、朝から風雨がありましたがお勤めさせていただきました。

八事霊園に永代供養墓を建立

石碑の正面には『俱會一處』と刻字致しました。『俱會一處』とは、仏説阿弥陀経にあります一句で、「ともに念仏して、阿弥陀仏の極楽世界で会う」という意味です。ご縁あって父母兄弟となり、喜びや悲しみを共にし、励ましあって生活をし、いのち終わって後は、浄土世界で再び会うことができるお念仏をいただきたいものです。



永代供養墓全景

永代供養墓は、ご門徒となられた皆様だけでなく、他の宗旨・宗派の皆様方の中で、寺の主旨をご理解いただいた方であれば、ご遺骨を納めさせていただきます。ただ皆様ご一緒の合祀墓ですので、ご遺骨を後日お返しすることとはできません。詳しくは、先日郵送致しました「安楽寺永代供養墓ご案内パンフレット」をご覧ください。

宗祖親鸞聖人七五〇回

御正当報恩講団体参拝の

参加者を募集致します

日時 平成二十三年十一月二七日(日)

集合 安楽寺会館前 午前七時

費用 八千円

定員 四十五名(定員になり次第締切)

行程は、午前の報恩講に参拝します。

昼食は、萬福寺普茶料理です。その後

宇治平等院鳳凰堂を見学致します。ご

参加ご希望の皆様は、先日送らせてい

ただきました募集要項の申込書にご記

入の上、会費を添えてお申し込みくだ

さい。お待ちしております。

仏教豆知識

第八回



念珠

念珠は数珠ともいわれます。他の宗旨においては、仏の名や陀羅尼（呪文）をとる数をかぞえる時に珠を使う場合もあります。

真宗においては、お称えするお念仏の数を問題にしません。仏前において合掌・礼拝する時は、必ず念珠をかけます。念珠を持たないでは、「ほとけさまをわしづかみにするに等しい」と、蓮如上人は戒めておられます。

念珠の珠の数は、人間の煩惱といわれる百八個かその約数が正式と申しますが、厳密な数は問わなくてもよいと思えます。それよりも、合掌・礼拝する時には、背筋を伸ばし、両手をみぞおちあたりで自然に合わせ、念珠をかけて念仏を称え、そして上体を深く下げて礼拝します。その作法を正しく行なうように心がけたいものです。

合掌・礼拝する時以外は、いつも左手か左手首にもち、畳の上などに直に置かないようにします。念珠を左手にもつのは、「インドや東南アジア諸国では、「左手は不浄な手」と、されていますので、その左手に尊い念珠をかけてきよめるという意味があるのです。現在でもこれらの国では、相手に物を手渡すとき、左手で渡したら怒られるといわれています。



一輪のとき



二輪のとき

お彼岸を境に、夏から秋へ移り変わり、季節感は日に日に深まっています。親鸞聖人の御遠忌法要参拝から、もう半年になろうとしています。

今年には御正當報恩講の年になり、例年にも増して意義深い報恩講が勤まります。「世の中安穩なれ、仏法ひろまれ」と、申された聖人のお言葉が全国津々浦々、全世界に届くような世の中になつてほしいと念願しています。

正信偈を称える我が身の在りかたが、明らかに見えてくる、そんな報恩講にしなければと思います。